

一誌一句(受贈誌10・11月号他より)

米田 透 抄出

万歩まで残り三百秋高し

(雲の峰)

朝妻 力

蔵にこほろぎ鉄眼一切経を刷る

(若竹)

加古 宗也

ゆき過ぎてよりいちじくの香とおもふ

(暖響)

江中 真弓

すいと来て肩にとまりし赤とんぼ

(燎)

蔵多得三郎

田舎にも都会と同じ木下闇

(天籟通信)

福本 弘明

少年のトランペットや梅雨明くる

(松の花)

松尾 隆信

砂浴びの犀の背中に小鳥くる

(陸)

中村 和弘

白桃の皮引く何も考へず

(森)

森野 稔

梅檀の実に仏性の鳥の声

(斧)

はりまだいすけ

螿螂の卵がかへりみな螿螂

(訝)

山本 一步